



Data
監督・脚本：原田真人
原作：司馬遼太郎「関ヶ原」（新潮文庫刊）
出演：岡田准一／役所広司／有村架純／平岳大／東出昌大／大場泰正／松山ケンイチ／春海四方／中嶋しゅう／中越典子／壇蜜／伊藤歩／北村有起哉／首尾琢真／和田正人／松角洋平／キムラ緑子／西岡徳馬／滝藤賢一

👁️👁️ みどころ

今年の終戦記念日に向けての戦争大作がこれ。『坂の上の雲』と並ぶ司馬遼太郎の最高傑作に沿って、原田真人監督が「関ヶ原」を映画化！女忍者・初芽の登場等のエンタメ性を楽しみつつ、島左近を通じた石田三成の人間性に肉薄したい。

そして、近江派＝石田三成＝淀君派VS尾張派＝加藤清正・福島正則＝北政所（ねね）派の対立軸と、それを見据え、徹底的に利用した徳川家康の大戦略を俯瞰しつつ、「関ヶ原の合戦」の実態に迫りたい。

しかし、本作こそ2時間27分の1本モノではなく、4時間の2本モノにすべきだったのでは・・・？そのため、一部わかりづらい点が出たし、大スペクタクルとなるべき「合戦シーン」の描き方にも不満が・・・。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

■□■原作は？テレビドラマは？俳優は？■□■

『日本のいちばん長い日』（15年）への挑戦（『シネマルーム36』16頁参照）に続いて、原田真人監督が挑戦したのが『関ヶ原』。『日本のいちばん長い日』は半藤一利原作の『日本のいちばん長い日』（大宅壮一監修）に基づくものだったが、本作は司馬遼太郎の『関ヶ原』を原作としたもの。同小説は『国盗り物語』『新史太閤記』に続く司馬遼太郎の「戦国三部作」の最終作であり、また『霸王の家』『城塞』と並ぶ「家康三部作」の1つで、『週刊サンケイ』紙上で1964年7月から1966年8月にかけて連載されたもの。私が読んだのはずっと後になってからだが、大いに興奮しながら読んだ記憶がある。

他方、これを原作として、1981年1月2日から1月4日まで3夜連続で放映された

テレビドラマもあり、私はこれも興味深く鑑賞した。同ドラマは加藤剛が石田三成役、三船敏郎が島左近役を、そして三国連太郎が本多正信役、森繁久彌が徳川家康役をそれぞれ演じた大型時代劇だったが、そこでは「関ヶ原の戦い」に至るまでの権力闘争の模様と人物像が原作に沿って詳細に描かれていた。また、クライマックスの「関ヶ原の戦い」でも、小早川秀秋の裏切りと大谷刑部の奮闘をはじめとする様々な人間ドラマが面白く描かれていた。したがって、本作については、まずは司馬文学の理解という視点からしっかり鑑賞したい。

次に俳優の面では、本作で石田三成を演じるのは岡田准一。『永遠の0』（13年）（『シネマルーム31』132頁参照）や『海賊とよばれた男』（16年）（『シネマルーム39』68頁参照）等の大作、さらにはNHK大河ドラマ『軍師官兵衛』等に続く主演だが、さて彼の熱演ぶりは？本作で徳川家康を演じるのは役所広司だから、俳優としてのキャリアと実力には大差がある。すると、関ヶ原の戦いで石田三成率いる西軍が敗北したのと同じように、演技面でも岡田准一は役所広司に敗北？いやいや、そんなことはないはずだが・・・。

■司馬遼太郎原作の魅力あれこれ！■

「関ヶ原の戦い」は1600年9月15日に起きた徳川家康率いる東軍と石田三成率いる西軍との激突で、チラシが謳っているように、「わずか6時間で決した史上最大の戦い」は、その後の日本の歴史を大きく変えたもの。もっとも、これは日本国内では「史上最大の戦い」だが、なぜその戦いに至ったのか？なぜわずか6時間の戦いで勝敗が決したのか？なぜ石田三成が西軍を率いたのか？等については、あまり知られていない。チラシにも「誰もが知る「関ヶ原」の誰も知らない真実」と書かれている。それを読み解く鍵が司馬遼太郎の原作だが、そこでは史実を踏まえつつ、デビュー作たる『梟の城』で、忍者葛籠重蔵を登場させた司馬遼太郎らしく、女忍者初芽（有村架純）を登場させる等エンタメ的な色彩も強い。司馬原作の『関ヶ原』の魅力はいろいろあるが、ここではそのいくつかを列記しておきたい。

その第1は、女忍者初芽の登場。これは司馬の完全な創作だが、ストーリー構成上大きなウェイトを占めるのでそれに注目！第2は、石田三成（岡田准一）が佐和山城の自分の禄高の半分を渡してまで家老を迎え入れようとした武将、島左近（平岳大）の人物像を押し出すとともに、彼との繋がりを通じて「純粋すぎる武将」と言われた石田三成のキャラクターを浮かび上がらせたこと。第3は、それまであまり知られてなかった石田三成の盟友、大谷刑部（大場泰正）のキャラクターを大きく取り上げたこと。第4は、従来、裏切り者、小心者のイメージで固まっていた小早川秀秋（東出昌大）の人物像に深く切り込んだこと。そして第5に、「関ヶ原の戦い」に至るまでの権力闘争として、官僚派石田三成＝近江派＝淀君派VS武断派加藤清正（松角洋平）・福島正則（音尾琢真）＝尾張派＝北政所（ねね）派の構造を司馬遼太郎らしく的確に描き、加藤清正や福島正則らが家康に取り込

まれ、石田三成と敵対していくサマを鮮やかに描いたことだ。加藤清正や福島正則から暗殺計画を立てられ窮地に陥った石田三成が、あえて徳川家康の伏見屋敷に逃げ込むストーリーをはじめて読んだときは、「目から鱗」の思いがしたものだ。

もっとも、司馬遼太郎の原作をそのまま映画化すれば当然テレビドラマのように8時間を要するため、本作はストーリーをかなり絞っているが、それでもナレーションを活用することによって原作を忠実に生かしている。本作については、原作をしっかり読むことが大切だし、それによって本作をより楽しむことができるはずだ。

■□■やはり4時間は欲しい。原田監督の弁解(?)は?■□■

キネマ旬報は本作を「時代劇の新たな頂点」と位置付け、8月下旬号と9月上旬号の2号にわたって原田真人監督のロングインタビューをはじめとする特集を組んでいる。原作を読んでいない人でもこれを読んで本作を観れば、本作の魅力や全体像がより理解できるだろう。しかし、そうでなければ、いくら要領よくまとめていても2時間27分では司馬遼太郎原作の全体像はわかりづらい。原作は、石田三成と島左近の親密さと信頼関係と対比するかのように、徳川家康とその家来の策士である本多正信との親密さと信頼関係を描いているが、本作ではそれはごく一部にとどめている。しかし、2時間27分の1本モノにするのなら、これは思い切ってカットしてもよかったのでは・・・?その他、私は原作のどこを描き、どこをカットするかについての原田真人監督の選択が少し甘かったのではと思っている。

ロングインタビューの中で原田真人監督は、「もともと、前後編で4時間くらいにするとところから始まったんです。でも途中で、言い出しつぺの会社が降りちゃって、1本にできないかと。泣く泣く伏見城の攻防戦をやめたりしたのです」と述べている(『キネマ旬報』8月下旬号51頁)。もっとも、「結果としては1本にして正解だったと思います。そのほうが関ヶ原に結集した武将たちの人間群像、そして三成VS家康の関係性、さまざまな政治的駆け引きがハッキリした。僕は現状の、およそ2時間半という長さが一番合っている気がします」とうまくとりなしているが、正直なところ、これは強がり・・・?

近時は、『64―ロクヨン―前編』(16年)(『シネマルーム38』10頁参照)、『64―ロクヨン―後編』(16年)(『シネマルーム38』17頁参照)、『ソロモンの偽証 前篇・事件』(15年)(『シネマルーム36』95頁参照)、『ソロモンの偽証 後篇・裁判』(15年)(『シネマルーム36』101頁参照)等、前後編で4時間くらいにまとめる大作が増えているのだから、まさに本作こそ、それにふさわしい素材のはずだ。

■□■1本モノ、2時間27分にしたマイナス点は?■□■

ちなみに、トルストイの名作『戦争と平和』を映画化したオードリー・ペップバーン主演の『戦争と平和』(56年)は3時間28分の1本ものだったが、国家の総力を挙げて制

作した(?)ソ連版の『戦争と平和』(67年)は、全4部作で6時間半を越す超大作。アウステルリッツの戦い、ポロジノの戦いをはじめとする大合戦シーンは、そりゃ映画史上に残るものすごい規模のものだった。それに対比する意味でも、司馬遼太郎の『関ヶ原』を原作として映画を作るのなら、それこそ前後編、全4時間モノで撮って欲しかったと思うのは私だけ・・・?.

2時間27分の長尺とはいえ1本モノにしたマイナス点は、多くの武将たちの多種多様な顔とその役割がわかりづらいこと。とりわけ「小山会議」の演出がそうだ。また、初芽、赤耳(中嶋しゅう)、蛇白(茶阿)(伊藤歩)等の忍者たちはキャラが立っているため、その人物像がよくわかるものの、「関ヶ原の戦い」を理解するための中核となる東軍の武将たる加藤清正、福島正則や井伊直政(北村有起哉)、松平忠吉、黒田長政(和田正人)たちや、西軍の武将たる安国寺恵瓊(春海四方)、小西行長、増田長盛、長束正家たちのキャラと役割の識別がイマイチ。それはすべて時間不足のためだ。時間があと90分あれば、もっと各武将のキャラと役割を詳しく描けたはずだし、それによってクライマックスの「関ヶ原の戦い」における各武将の役割もより理解できたはずだ。したがって、本作の制作費をケチって前後編とせず2時間27分の1本モノにしたのは失敗だと言わざるを得ない。

さらに、石田三成にセリフを早口でしゃべらせたため、その言葉が聞き取りにくいことも大きなマイナス点だろう。劇場から出てきた客のそんな声もあちこちから・・・。

■□■なぜ三成は負けたの?小早川秀秋の裏切りの実態は?■□■

前述のとおり、本作のチラシには「誰もが知る『関ヶ原』の、誰もが知らない真実」と謳われているが、そこにいう「誰も知らない真実」とは一体ナニ?本作は2時間27分の1本モノに収めるため取捨選択の優劣はあるものの、司馬遼太郎の原作『関ヶ原』に沿ったものだから、原作を読んでいる人にはナレーションを含めてその基本構造がすぐにわかる。したがって、冒頭の石田三成と島左近との出会いのシークエンスからして、「誰もが知る『関ヶ原』」のストーリーが展開していくことになる。

他方、本作を見終わってもチラシにいう「誰も知らない真実」とは何かがよくわからないが、私の理解では、それは「関ヶ原の合戦」の勝敗を分けた小早川秀秋の裏切りの実態らしい。司馬遼太郎の原作でも、テレビドラマの『関ヶ原』でも、小早川秀秋はあらかじめ家康との間で裏切りの密約を交わしていたが、肝心の時が迫ってもなかなか動かない小早川秀秋にしびれを切らした家康が、「大砲」を打ち込んだため、「家康が本気で怒っている」と感じた小心者の小早川秀秋がやっと裏切りを決心し、大谷刑部の陣地に攻め込んだというストーリーが描かれ、それが真実だと思われてきた。ところが、本作にみる小早川秀秋の裏切りの実態とは・・・?本作に見る原田監督の演出を見ると、なるほどそういう解釈もありかと思う反面、私はそんな馬鹿な、と思う面が強い。さて、あなたの理解は・・・?

日本の合戦史上最大となった「関ヶ原の合戦」が、結果としてわずか6時間で決着がつき、東軍の大勝に終わったことは歴史上の事実だが、なぜ西軍が大敗したのかについての分析はしっかりやる必要がある。石田三成はもともと西軍の「総大将」ではなく、毛利輝元や小早川秀秋、さらには島津豊久らの大大名をまとめる調整役に過ぎなかったことは明確だが、本作ではその調整役としての役割を十分果たせなかったことはしっかり描かれている。しかし、これは最初から想定内のことだったの？それとも石田三成が「勝機は我にあり」と叫んだにもかかわらず、あちこちから誤算が積み上がってきたための？そこらあたりが本作を見てもイマイチ・・・？

■合戦シーンの描き方は？これで理解できる？■

日本には、かつて黒澤明監督という世界的巨匠がいた。彼が監督した戦国絵巻の傑作である『影武者』（80年）や『乱』（85年）では、勝新太郎の降板をめぐるドタバタ劇や、天侯が絶好の状態になるまでいつまでも撮影を待ち続けた等々、さまざまな逸話が残されている。そんなサブストーリー（？）も面白かったが、これらの作品における合戦シーンの見事さは、日本の戦国時の合戦絵巻として最高のものだった。まさに、空前絶後、CGを駆使した今の映画では到底考えられない人海戦術と大金をかけた映画製作だった。それでも、ソ連版『戦争と平和』に見た、「アウステルリッツの戦い」や「ポロジノの戦い」のスケールには及ばないが、その集団的戦闘シーンは映画として最高のものだった。しかして、本作のクライマックスで描かれる「関ヶ原」の合戦シーンは・・・？

それについて、キネマ旬報9月上旬号における岡本修造氏の「三成と家康の駆け引きから合戦まで 作り手のエネルギーが全篇から伝わってくる」は、「最初は長槍部隊が相手方を叩きのめした後に接近戦へとなだれ込むところでも、最初は槍の動きが揃っていて美しいが、やがてその陣形が乱れて混戦になっていくという、「美から乱」へ変化する戦いが基本だ」「本来命のやり取りをする合戦では、遠目から観た陣形のきれいさを保てるはずがない」と分析したうえで、「彼は影響を受けた作品の一つに黒澤監督の『七人の侍』（54）を挙げているが、あの映画の最後に出てくる雨が降りしきる中で行われる、生き残りをかけた野武士集団と侍&農民たちの泥まみれの戦闘、それを合戦の規模に拡大したのが今回の映画で、昔の黒澤映画や外国の戦争映画へのオマージュを捧げながら、これまでにない合戦シーンを創造した監督の力業は評価されている」とまとめている。

しかし、私たちが小学生時代にやった運動会の騎馬戦でも集団戦法が基本だったように、数万人の敵味方が激突する合戦ではやはり集団戦が基本で、そのための戦略と戦術が勝敗を分けるはず。そのことは、「曹操」や「三国志」等の中国ドラマにおけるさまざまな合戦シーンを見ても明らかだ。したがって、『七人の侍』へのオマージュはいいが、同作の戦闘シーンと「関ヶ原の合戦」の戦闘シーンを同列に論じるのはナンセンスなのでは・・・？私はハッキリ言って、本作の合戦シーンにはかなり不満がある。だって、本作ではどの部

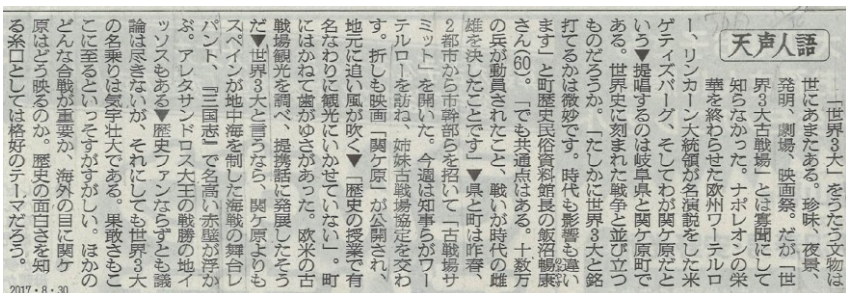
隊がどこで、どの部隊とどのように戦っているかがサッパリわからないからだ。6月24日に観た『ハクソー・リッジ』（16年）の戦闘シーンですら、「ハクソー・リッジ」の岸壁をよじ登った米軍が、いかに日本軍に撃退されたのかがよくわかるように描かれていたのだから、「関ヶ原の合戦」では、どこに配置された誰の率いる部隊がどこをどう攻め、それを誰がどう受け止めたのかという合戦内容をもっとわかりやすく見せる必要があったのでは・・・？

■世界三大古戦場を提唱！その心意気や良し！■

私は本作を公開初日に映画館で鑑賞したが、客席はほぼ満席。『トランスフォーマー』や『ワンダーウーマン』、さらには『ダンケルク』や『エイリアン・コヴィナント』等のハリウッド大作が次々と公開される中、本作がどこまで観客を集めるかが注目される。また、日本では毎年8月15日の終戦記念日に向けた「戦争大作」が作られてきたが、今年はそれがなく、8月26日に公開された本作がそれに代わるものらしい。したがって、冒頭に述べた司馬文学の理解という視点からはもちろん、8月29日早朝の弾道ミサイル1発の発射に象徴されるように、北朝鮮からのきな臭いにおいがプンプンする昨今、日本国の様々な戦略戦術を考える視点からも、本作の大ヒットを期待したい。

なお、「関ヶ原」という地名は日本人には有名だが、世界的には如何に？近時やっと小泉内閣時代に提唱された「観光立国宣言」が実を結び、外国人観光客の来日が急増しているうえ、その内容も「爆買い」から「コト消費」に大きく変化している。しかし、古戦場という視点から「関ヶ原」を考える外国人はどれくらいいるの？それは日本人でも少ないはずだから、外国人観光客にはまだまだだろう。そんな中、岐阜県と関ヶ原町は、「わが関ヶ原」を欧州ワーターローと米ゲティスバーグに並ぶ「世界三大古戦場」と提唱しているらしい。その心意気や良しだが、その広がりには・・・？

それについては、8月30日付け朝日新聞の「天声人語」は次のように書いているので、本作の鑑賞にあわせて、これについてもしっかり考えたい。



2017（平成29）年9月1日記